

女たちの輝かしいエンブローダリー
ー ライフストーリーを綴るなかで見えてくる
当事者性と連帯 ー

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
木嶋 由佳

本研究では、女性が時代を経ても社会からも女性たち同士も分断され、周辺化させられ、社会的に力を持てない現状があり、しかもそれは可視化できない。そのような女性たちの回復について明らかにすることを目的にしている。

本研究では、すべて「私」を主語に語る。過去の自分を対象化することなく、今の自分とつなげて、女性の現実を語る。また、女性同士を私とあなたではなく、一人称のまま、「わたしたち」として連帯し、社会改革として声を上げるものとする。

自身の 3 つの手記を元に、一人の女性のライフストーリーとして時系列に並べ替えた。文献研究により、時代背景と女性史にとって重要だと思われる社会的事象や制度の変化を重ね合わせた。7 人の女性のインタビューをテーマの内容に合わせて補足した。

結果においては、女性が社会から分断されていること、女性同士も分断されて存在していることが示唆された。しかし、そのなかで見えてくることは当事者性の重要性とそれに気が付いた婦人相談員の在り方や実践であった。当事者性とは、分断を超えるパスポートの役目を果たす。自身と他人を理解し、多様なコミュニケーションにより呼応し連帯するエネルギーである。女たちが当事者性を鍵に連帯する様子は綴られた輝かしいエンブローダリーとして生まれる。分断で孤立した女性たちが、出会い、つながる仕掛け連帯するきっかけとなるのが「相談」の一つの側面であることが明らかにされた。